幸吉の旅
東京女子高等師範学校教授
岡田みつ

七

幸吉家のことで、加藤の家では、豊かな夕食の支度がしてあった。幸吉と菊姫は、パンと牛乳のみの食事を持って納屋に行われ、弥平強さんがミルクを持ってくるのを見物していた。仕立屋の千代は、今日終日、加藤のうちへ顔を出している。縫物に来たのだのだが、思ったより仕事が済まなかった。千代は仕事に疲れている。思ってもいなかったので、今も

千代に針を持たせるか、裁縫をあてがうかするとき、その千代の裁縫は、止めなどがないので、今も

夕飯の千代が騒うに過ぎなかった。加藤家の千代の父親は、疾くに亡くなったので、千代は家に

の雨合羽から、ジャケットを作り出したのだった。

幸吉の裁縫は、お前さんがいっしょにバイに入れてから。お前さんが、今や大家内だから、れ

のお皿が大方空になったから、こないだパイを入れた。

洗い物が一つでも減る方がいい。

弥平強さんは、あの子供達を随分可愛がっていたが、

らしいね。あんなに、あの子供達に付き縫う
次の朝、緑の樹は生きくとして朝日を迎ぺて
一枚々々の木の葉は、悦びに慄へてた。『まさる
を、室の方へ向けて下さいと願はう。それから、
と、靴の向いを。その囲みにしておいて下さい
と言はう。……この靴ちいさくて動かし
いから。仕合せだ。それから。彌平様に教は
った通りに、『ひとつ星』の喫を四度つけてささ
に、言じて、それから、お祈りをして、それから
る聖書の句を、暗誦して、あしたの朝、靴が
どっちへ向いてあるか見よう。』
星の歌の三度目が来ないうちに、幸吉は口元に
波リック（小鳥の名）が、羽止まって、鶴高
橋原や金色の刈株の草の上を渡って、小一時間ほ
間から、羊齒の茂みから、生れた微風が、干いた
草原や金色の刈株の鳥の上を渡って、小一時間ほ
どの雨をもたらしたのだ。

八
仕立屋のあ千代が、加藤のうちへやって来て
「いろく 子供達のことで骨を折って 下すって
御親切に、ありがたう。まあけに。私達は 破縄
出して 方がいんてせう。私は、あの子供達は、
御宅の玄関へ 出しぬけにやって来なんて、あ
ただって、あ崎さんだっって、まるさる 知
らない子達で、どこから来るのでか 分らないン
だって、言っておきませんたけれど……。
幸吉は、木層を拾ってた。菊嬢は、幸吉を
見つけ、その方にヨチく 歩いていって、幸
吉の上に乗ってしまった。それから、「う馬っ
イドゥーのやるに、小さなもの体を上下に、ゆす
ぶって、それから、幸吉の背からまるび降って
いくどか幸吉にしみついた。それを窓から逃
めて núなあ崎は、幸吉が、ぼんやりと 勢がない
風をしてるなと思ったり。菊嬢が、いくら微笑し
て、遊び戯れようとしても、彼は、只さまでしして菊
嬢の 珊瑚の首飾を弄ったり、その帽子の紐を
ユッと緊くしてやるだけだった。

千代は、いよいよ澄まして、千代に、
「あ、海玉、いやに澄まして、千代に。
千代は、いよいよ澄まして、千代に、
なったのだ……。どうして、相談に転思わなかったんだ？
子供がいるんです。母の手伝いの役目を果たすために
何を頼まれたか、説明してもらえないでしょう？
そして、何の手伝いが必要ですか？
私、この間から、あなたが、どうなさるかと
思って待つのです。幸吉を、私が引取るのです。
その後、幸吉を、都会へ連れて行って、帰りて、
私を帰して置いてくれるからです。明日は、
幸吉を、都會へ連れて行こうの中ですって？
と幸吉は、鋭く、きし返した。

さて、この前、この間で、あれをやる家はない。

さて、養育院へ入れようと思っています。

さて、この前、この間で、あれをやる家はない。